

基調講演

人間の苦について —原始仏典に見る救済論—

千葉 公慈（東北福祉大学 学長）



講演概要

原始仏典によれば、人は誰も例外なく「三毒」という煩惱を有するという。「生・老・病・死」の根本苦の原因と位置付ける「貪（ラーガ）、瞋（ドヴェーシャ）、癡（モーハ）の三煩惱である。さらに仏教では、人はこうした複数の煩惱によって、本来的には悟りを開くことが出来るはずの法性（あるいは仏性）が覆われた状態になっているとし、それを「無明」と説く。

かくして三毒は、世間体の裏に隠されているものの、各人の日常の言動を身（身体行為）・口（言語行為）・意（心理行為）にわたって強く支配し続け、とりわけある条件が揃う（これを縁起するという）場面では、それらの行為が突出した形で表出する。その条件（因と縁の起）とは、当人が何らかの要因で追い込まれた状態であることや、群衆にまぎれた匿名の環境にあることなどである。ゆえに現代のネット社会にあつては、まさにその条件が充分すぎるほどに満たされることになる。

この「三毒」について現代的に敷衍すると、「強欲と怒りと無知」というニュアンスに近くなる（ただし同義ではない）が、他方、私たちは経験上「強欲と怒りと無知」の行きつく先には、ある“恐ろしい結末”が待っていることも自覚している。それは根拠のない自己（自民族や自国）の正当化による他者否定の系譜である。現実世界において他者否定の具体例としてもっとも恐れなければならない事象は、暴力と差別（最終的には戦争）という負のスパイラルであろう。

私たちは今、その予兆的現象の“格差と分断”を目の当たりにしつつ、暴力と差別が横行する世界的趨勢のただ中にあるといっても過言ではない。実は歴史的に戦争が繰り返される理由もここにあると思われるが、では何故にこの系譜には歯止めが利かないのであろうか。その疑問を考察する勘所が、とりわけ原始仏典には頻出しており、その一端を示せば次の通りである。

「もろもろの欲望にこだわり、もろもろの欲望にしがみつくものは、
結使（=煩惱に操られていること）にある自己に過ちを見ることはない」

『自説経』七、三

ゴータマ・ブッダの言葉を伝える「小部」第三経の『自説経』には、紀元前の当時の様子がリアルに記述されており、古の出家者たちによる苦悩の発露を今に伝えている。

当時の仏弟子たちは、日々托鉢のために街へと出向き、そこで様々な出来事を見聞しては精舎へ帰房する。すると彼らは、さっそくブッダにそれらを報告するのであるが、その時のコメントのひとつが当該の句とされる。

その日、コーサラ国のサーヴァッティーでは何かの祝いごとがあったのか、街じゅうが大いに賑わっていた。中に

は泥酔した者、踊り耽る者、大声で喧嘩をする者たちが多くいたようで、「人々は度を過ぎて大いにもろもろの欲望に執着す」と仏典は記している。

その様子に仏弟子は、何か人間の本質的な問題を感じたがゆえに直ちにブッダに仔細を伝えたものと推測する。ブッダによると、「三毒の結使にある者は、決してその欲求の過失を自覚することはない」という回答であった。「結使」とは無意識下に束縛、操作されることで、三毒は天使の顔をして人を惹きつけ、縛りつけたまま、どこまでも陶酔させる魔物（マール）であり、かくしてブッダは、人間の苦の本質的な問題を提起するに至る。

今回の講演では、こうした原始仏教の扱う人間の苦をめぐる諸問題を論じる予定である。

プロフィール

【略 歴】

1964年、千葉県市原市朝生原生まれ。

駒澤大学大学院人文科学研究科博士後期課程満期退学（文学修士）。

駒沢女子大学教授、曹洞宗教誨師を経て、現在は東北福祉大学学長および

学校法人梅檀学園常務理事。東北福祉看護学校校長。

大本山永平寺公開講座講師。曹洞宗宝林寺第24世住職。

曹洞宗寺族通信教育委員会委員。(株)小湊鐵道取締役。

千葉県市原市「いちばら観光大使」。地域おこし隊「いっぺあ de 溪谷」代表。

2017年グッドデザイン賞受賞（受賞番号 17GO70631）。

専門分野はインド仏教教理学。日本文化論。

テレビ、雑誌、講演などで仏教の教えや生き方を説く。

また民俗学や日本人の思想にも造詣が深い。

【著 書】

著書（単著）

『知れば恐ろしい日本人の風習』

『仏教から生まれた意外な日本語』

『心と体が最強になる禅の食』

『うつが逃げだす禅の知恵』

『お寺と仏教』以上 河出書房新社

『祖師に学ぶ禁煙の教え』 仏教タイムス社

『心に花を咲かせる言葉』 双葉社

『運がよくなる仏教の教え』 集英社（萩本欽一・千葉公慈共著）ほか。

※曹洞宗誌『てらスクール』にて「こちらてんぐ山 おてら掲示板」月刊連載中。